

# 社会主義リアリズムの問題

——森山啓の評論を中心に——

中 村 完

平野謙は「文学・昭和十年前後」(『文学界』昭和35・3)の第七回分を亀井勝一郎の『転形期の文学』の評価にあてているが、文中、次のようにいっている。「現在はつかわれなくなつた転形期という言葉をきくと、私は昭和十年前後の特殊な一時期の雰囲気は湧然と思ひだされてくる」と。昭和十年前後の「特殊な一時期」の雰囲気は、正直にいつて、こんにちの私たちには実感としてはとらえにくい。文学研究における実感尊重は当然のこととしても、雰囲気への実感による抵抗なり妥協の意識が論理のくもりとなつて、ナルプ解散、『文学界』創刊、転向文学の簇出、こゝにいつた問題の問題としての焦点をぼかすことになつてはならない。マルクス主義文学の末期、その政治主義的偏向への批判は、作家同盟の内外から時を同じくしておこつた。そして批判の大半は作家同盟の「前衛」「階級」の観点そのものではなく、観点への固着を強制する同盟指導部の公式主義的態度に向けられた。現在も、文学主体の資格を論点とするこの批判のありようは正しい

ものとされている。しかし、指導部の「政治主義」を主体的条件無視の一点で批判するのみで、ナルプ解散後のリアリズム検討などをマルクス主義文学評価の問題からはずしてはならない。森山啓の社会主義リアリズム論などは、解散以後の最も正統な理論作業として、もっと腰の入つた評価をうけていいのではないか。亀井勝一郎にとつては、みずからの手による組織の解散という大敗北を、いかに受けとめるかという態度決定をぬきにして、森山啓のように終始一貫プロレタリア文学擁護の論陣を張ることは、かえつてそれぞらしくみえてしかたがなかつたのである」と平野はいう。亀井自身の「態度決定」が、結局、社会的実践との訣別、理念への憧憬による精神形成であつたこと、これは、『人間教育』やゲーテ論以降の亀井の仕事にはつきりあらわれている。もし亀井がナルプ解散の「みずからの手による」意味を自己批判の問題としてつきつめていたなら、他人の自己批判ぶりを顧みる必要も余裕もなかつたはずである。敗北への態度決定という個人の意志の問題にからむ亀井の異常な執着は、たんに悲劇愛好者の気質によるものではない。敗北是認の雰囲気を利用して、文学における当

面の主題を個性復興に限定しようとする、そういう積極的なきりかえの論理がはたらいいていたと思われる。この個性復興の要求は林房雄における「革命的ロマンチズム」の待望や保田与重郎のリアリズム否定など、この時期に抬頭した主観主義傾向の文学に共通のものだし、また、『文学界』を中心とする文芸復興の中心課題として、やがて小林秀雄の「私小説論」(昭和9・5・8)に、それ自体一個の明確な主題として定型される。

そうした状況を考えると、亀井らの提出するこの知識人ごのみの主体性論に抗して、「終始一貫プロレタリア文学擁護の論陣を張ること」は、むしろ容易ならぬわざであり、森山としても困難を承知でかかった仕事であった。森山の社会主義リアリズム論は、可能なかぎりの広義の解釈によって、客観的リアリズムの歴史的正統性を示し、逆に、ひろまりつつある主観主義一般の非政治的偏向を抑制する、おそらく、その点に、最大の目標を置いていたはずである。「森山は、蔵原惟人や中野重治がとらえられ小林多喜二や宮本顯治が地下にもぐつた一時期から、社会主義リアリズム論の日本的消化のために孤軍奮闘した人である。」と、平野は同じ文章で森山の「孤軍奮闘」をみとめている。そしてこのばあい、社会主義リアリズムに対する森山の「日本的消化」作用は、実は同時に、ナルプ直伝の「前衛」の観点にも及んでいるのである。この点に、森山がナルプ解散後における旧左翼理論の「孤独な」正統として、その理論活動を「孤軍奮闘」のかたちで進めなければならぬ理由があった。しかし、「プロレタリア文学の擁護」という森山の善なる意図が現実的な効果をもたなかつ

たわけではない。ナルプ解散前後に発刊された『文学評論』『文化集団』『文学建設者』『詩精神』など、プロレタリア文学系の諸雑誌における指導理論は、おおむね、森山の理論にかみあうものであったし、森山自身に、これら諸雑誌の公約的理論を代弁する意図があったかもしれない。さらにリアリズムの継承という意味では、武田麟太郎・高見順・本庄陸男らの『人民文庫』(11・3創刊)の庶民的リアリズムに、森山の発言が直接に、あるいは前記のような左翼雑誌を媒介に影響している点がないとはいえない。むしろこの時期には、森山の関知しない別途の「日本的消化」によって「前衛の観点」は、ほぼ解消するかたちになってくるのだが。

## 二

ソヴェエトにおける社会主義リアリズムは、七年四月、党中央委員会で決議・採択され、同年一〇月、作家同盟中央組織委員会に上程されている。しかし、ナルプ機関誌『プロレタリア文学』(7・1創刊)に載った紹介としては、上田進の解説「ソヴェエト同盟における文学団体の再組織の問題」(7・7)と、ソ同盟の指導理論家の一人フツベルトの「ソヴェエト同盟に於ける文学運動の成果と展望」(8・11)の翻訳、この二編があり、そして、それをナルプ末期の「唯物弁証法的創作方法」を軸とする指導理論にくみ入れたものとして、鹿地亘の「社会主義的リアリズムから我々は何を学ぶか」があるにすぎない。ソヴェエト作家同盟の指導方針をこの程度の紹介で扱わねばならなかった点に、実は、

当時のナルプの苦しい状況がうつし出されているのである。

社会主義リアリズムの論旨は、(一)創作の根底に階級の観点、が置かれていれば、それでいいのであって、その直接的適用によって現実を公式的に解釈すべきではない。(二)作家は個性的な資質・感覺を生かして、現象・事物に階級発展の眞実をさぐり、それを反映すればよい、ほほ以上の二点に概括できよう。ラップの示した指導方針「唯物弁証法的リアリズム」が現実解釈のリアリズムであったとすれば、これはいわば、反映のリアリズムということになろう。そしてこの一種の反映のリアリズムの採用は、ソヴィエト社会の現実が公式的な解釈を必要としないほど、ゆたかなものになったという認識を前提としている。とすれば、階級の観点自体が危殆に瀕しているような日本のマルクス主義文学運動が、その段階で、社会主義リアリズムを実践の方法として正式のプログラムにくみいれることは、まさに運動自体の死を意味するものであった。そうであればこそ、ラップの唯物弁証法的リアリズムに当るものとして蔵原惟人によって絶対化された「芸術方法における弁証法」は、社会主義リアリズムの受容によって変革されるどころか、むしろ逆に、宮本顕治の「政治性の優位の問題」(7・9)などによってかためなおされたのである。ナルプ解散は、官権の弾圧という外的原因に、理想と実践との跛行を取捨しかねたような運動内部の自己矛盾がからみ、そこからひきおこされた必然の結果であった。

徳永直の「創作方法の新転換」(8・9)は、社会主義リアリズムの受容困難な、そうしたマルクス主義文学全体の窮状を承知の

上で、作家同盟指導部の政治主義批判に、ほかならぬ社会主義リアリズムの理論を逆用した論文である。徳永は、創作実践の政治的適応を指導部の誤謬として批判したのだが、彼自身作家同盟の旧幹部であり、しかも社会主義リアリズムを論拠としての発言だけに、同盟の内外に与えた影響は大きかった。林房雄は「プロレタリア文学の再出発」(8・10)「一つの提案」(8・11)によって、徳永の指導部批判からさらに、作家同盟の解散という具体案の提示にまですんだ。徳永・林の提論は、指導部への要求としては文学を政治的観点から切断すること、同盟各成員への要請としては、文学を文学として通しきる作家としての主体性を確保すること、この二点を眼目とした。林のばあい、その指導部批判は、むしろ、『文学界』創刊(8・10)の契機につながるものであった。

林はすでに前年、指導部批判の口火をきっており、「作家同盟常任中央委員会」の名で出された「右翼的偏向との闘争に関する決議」(8・5)は、こうした反指導部の発言に先手を打つつもりの手順であったろうが、結果として、作家同盟内部の病状を悪化させることにしか役立たなかった。「我が同盟はあらゆる革命作家を成員として獲得して行くものである、その中に、指導のボルンエヴィキ的方向を拒む『同伴者グループ』が別個に存在し得るものではない」という宣言は宣言としては旗幟鮮明である。しかし実効本位に考えれば、まことに芸のない駄文である。指導部いいうところの「同伴者グループ」は、このばあい内容規定がはっきりしないが、ともかく、グループとして結成されたような反指導部勢力はこの段階では存在しなかった。むしろ、政治主義批判への

妥協のない高飛車なきりかえしが、一種の挑発行為として、林や徳永の積極的な再批判をひき出したともいえる。社会主義リアリズムを逆用して運動全体のプロレタリア・リアリズムへの復帰を正当化する、そのもっともらしい口実を徳永に与えた責任は、指導部の方であったというべきかもしれない。いずれにしても、窮屈な自己規制を身に課した作家同盟が、率先して、自己の立場にひきつけて社会主義リアリズムを問題にし、これに「日本的消化」をくわえていくことは困難であった。

### 三

『プロレタリア文学』終刊号(8・11)には、鹿地亘の論文「社会主義的リアリズムの討論から我々は何を学ぶか」に、森山啓の文芸時評「批評家への希望。方法と世界観、リアリズムと唯物論」が載っている。この二つの文章の対照によっても、ナルプ末期の態勢・方針の混乱をよみとることができる。同盟指導部も、八年後半には、官権の弾圧、ブルジョワ支配の強化、階級的組織活動の停滞、同盟内部の抗争など、いくつかの理由を挙げて、現実の進行に対する創作実践の「立ちおくれ」を指摘している。そしていくつかの要因からくるこの困難な状況を「創作活動の弁証法的統一」というナルプ本来の実践方向にむかってのりきることの不可能も、すでに明瞭であった。創作実践に対する指導方針の再検討、転換は必然のことであった。鹿地と森山の論文も、この創作活動と組織活動といういわば政治と文学の問題について、対照的な見解を出している。鹿地のは、社会主義リアリズムに藉口する

かたちで前衛・階級の観点の確保をはかった応急修理の論であつて、基本的には、蔵原・宮本による理論系譜の延長上にきずかれ「立ちおくれ」の克服のためには、イデオロギーのよりきびしい確な把握が必要であり、その組織活動への適応を通じて芸術の方法もゆたかになる。鹿地はこう論じて、文学に対する政治の優位性にこだわる。むしろ、この時期に鹿地が用意していた方向転換論『文学運動の新たな段階の為に』(8・12)が問題となるが、いまはそれにはふれない。

森山は、社会主義リアリズムに名を借りただけの鹿地文とは逆に、一言も社会主義リアリズムのことにもふれず、しかも立論の根底をその援用によってささえている。多様な創作方法による世界観の個性的な説明によって、組織活動自体も充実する、こういう立論のしかたをみると、森山は、政治に対する文学の優位性をみとめているかのようである。「かのようである」というのは、森山の論理設定があいまいだということではない。政治と文学の錯雑した結びめをいかにときほぐし、再調整するか、そこに示した森山の手順の柔軟さをみとめたいからである。次にかかげた文章は、「批評家への希望」中の最も重要な部分である。

ナルプは、いふまでもなくコンムニスト作家のみの組織ではないし、又さうであつてはならないのだから、組織される革命的作家の多くは、その政治的見解、芸術観、乃至世界観において、コンムニスト作家とは、それぞれ程度のひらきをもつことは当然である。そして大切なことは、あたかもそれらの作家の発展の可能を見ないことが誤謬であると同様に

それらの作家に完全なポリシエウイキ的な政治的見解、芸術観、乃至世界観を「強制」することは全く誤謬であるといふことである。それらの作家の発展を現実的に促進する一つのものは、そのやうな強制ではなしに、より高い作家の卒先的な活動の「影響」や、充分に納得のゆく啓蒙的批評である。

かつての「ナツプ批評家の新しい任務」(5・3)を想起すれば批評および批評家にかかる政治の重圧は、なかば除かれた印象である。しかしここで、この論にふれて強調しておかねばならぬのは、森山は、蔵原・宮本の線でかためられたナルプの政治主義をそのまま否定したのではなく、政治主義や政治主義否定の卑俗な論議に抗して、マルクス主義文学固有の前衛・階級の観点をまもろうとしたことである。つまり森山のねらいは、階級の観点の大衆化にあったわけで、その俗化にあったのではない。

平野謙は前記の論文で、「森山の論文には、作家同盟以前と以後における質的な相異がほとんどみられなかつたといつていい」といつている。『文学界』同人になつてからの森山の仕事については未見のものが多く、断言はできないが、『芸術上のリアリズムと哲学上の唯物論』(8・11刊)、『文学論争』(10・8刊)に収録されたかぎりの論文についていえば、平野の指摘するところである。「質的な相異」がないということは、森山の階級的なリアリズム認識が不動のものであつたことの証明にならう。が、それ以上に重要なことは、ナルプ解散後、プロレタリア文学の指導理論家として森山が一貫してとつた、その対症本位の柔軟な理論方式である。森山の評論活動について、状況判断においてはオポチュニ

ズム、理論傾向は折衷主義、と、てがるにきめこむ意見もなくはない。しかし森山は、決してオポチュニストでも折衷主義者でもなかつた。

ナルプ解散後、文学における左右両極への極分解がおわり、個性復興という統一的な主題が、主観主義・反リアリズムの態勢のもとに固定されかけてきた状況下にあつては、リアリズムの能うかぎりの正当な擁護が必要であつた。こんにち、その必要は誰の眼にもあきらかだが、しかし当時、リアリズム再検討の問題は論議のにぎわいのわりに、その結実は意外に貧しかった。マルクス主義文学の敗退による一面の安堵と迫りくるファシズムへの不安と、この切迫した背反的心情を主体確立への意志にきりかえる作業は『文学界』を中心に進められたが、この知識人的課題の推進には、政治・社会への顧慮の意識的なきりすてが伴つた。社会的実践を媒介しない個人本位の内面的な人間省察は、当然、大衆からの孤絶感をよぶ。「不安の文学」への共感、実践の基盤を喪失した知識人に必然の孤独な知的彷徨であつた。しかし、行動主義がもたらすような連帯感、行動の終了とともに消える性質のもので、永続的な個人連帯の場を提供しない。とすれば、当然、主体の内省や行動の問題に併行して、他方に、個人の存在状況や個人に及ぶ社会的影響の要因をさぐるリアリズムの成熟した眼が必要である。森山の理論活動には、むしろ典型的にはないが、そういうリアリズム本来の社会的な目的意識と、目的意識を適度に抑制する文学表現への具体的配慮とがあつた。川口浩も、森山とともに、蔵原・宮本・鹿地らのあとをつぐプロレタリア文学

理論の二本の柱であったが、かれには、理論活動にたえず現実反映をこころがけたような森山の理論的フレンジビリティはみられなかった。

#### 四

ナルプ解散後は、森山も川口も雑誌『文学評論』を中心に活躍した。だが、この二人の理論活動の推移を比較してみても、プロレタリア・リアリズム擁護の方向にもちがいのあったことにきづく。『文学評論』にかかげた『否定的リアリズム』の批判で森山は、ナルプ本来の「唯物弁証法的創作方法」との訣別があまりに性急にすぎる点に、川口の公式性をとらえ、批判している。川口のいう「否定的リアリズム」は「現実そのものが堪えがたいまでにネガティブであるとき、そのただれた上皮をひんむく」必要をいったもので、現実暴露への傾斜に社会主義リアリズムの誤用といった点もみられ、結果として、徳永の「芸術方法上の新転換」を許容するかたちになっている。森山は川口のその社会主義リアリズムの誤用を指摘して、「リアリズムに現実的な歴史的性質を与へる根本的なものは、その方法をとる作家達の実践生活、及び世界観である。」と、マルクス主義世界観の必要を積極的に論じている。ネガティブな現実を一個の状況として客観的に描ききるためにポジティブな価値観が必要だということのほかに、作品中の人物の「ネガティブな存在」が「ポジティブな存在」に変わってゆく、そういう主体変革のありようを価値づけるものとして、森山はマルクス主義世界観の適用を考えているのである。そして

自己変革に世界観を主体的に適應する「ポジティブな存在」を描いた作品の例として、小林多喜二「蟹工船」「転換時代」、徳永直「太陽のない街」、須井一「綿」「労働者源三」、窪川いね子「キヤラメル工場から」、鈴木清「檻房細胞」等々を挙げている。

創作および批評に関するこの森山の基本的な認識は、唯物弁証法の論理機能を転化したもので、それ自体、作家および作中人物の「人間」の教条的政治主義からの解放を意味した。この人間把握の方法は、「文学に於ける『性格』及び心理描写の問題に關して」(8・4)など、すでに初期の評論を通じて森山が、マルクス主義批評への批判的継承のかたちで提出してきたものだが、注目しておきたいのは、蔵原が「芸術的方法についての感想」で「愛情の問題」の解釈をめぐって提示したような柔軟な批評方式に、森山がマルクス主義文学批評の理想型を確認していることである。ナルプの末流批評家の多くが、蔵原理論を政治主義本位に固定したのに対し、森山はむしろ、蔵原理論の芸術論としての正統性を確認し、その活用によって、プロレタリア文学理論の再整備をはかろうとした。いいかえれば、森山は、自己の社会主義リアリズム論を蔵原理論の吸収によって成熟させ、その観点から、ナルプ解散後の紛雜なリアリズム論議に抗しつつ、多喜二以下の実践を「正当に」評価しようとしたわけである。前述の「否定的リアリズム」批判にしても、森山の意図は、川口との対決よりも、マルクス主義文学における創作実践の成果を人間成長の歴史としてもみわたせるような、包括的な現実批判の可能な新たな「前衛」の観点の用意に向かっていたと思われる。この点に、ナルプ

解散後、おなじく「創作及び批評上の図式主義」の克服を批評実践の契機としながら、森山が川口とちがったかたちで社会主義リアリズムをうけとめ、「日本の消化」をくわえてゆくいわれもあった。そしてその「日本の消化」自体が、客観状況の進行とのにらみあわせによって進められた点に、他と異なる森山のリアリズムの本領があった。

ナルブ解散後は、旧指導部の政治主義に対する批判は、文学主体としての資格の問題を中心に左翼リアリズム一般への批判としてひろがり、九年になると、決定的な批判が集中的にあらわれる。保田与重郎の「依托者の有無」(『現実』9・6)もその一つで、直接森山を名ざしての批判論である。保田はこの論で、転向を自己批判の問題からそらしたばかりか、作品創造の衰弱を理由に、政治主義否定にからめてマルクス主義文学のオール否定にふみこみ、さらにこの飛躍した論理の上に作家の義務として「文学する精神」の探求を要求している。これは、根拠のない中傷を批判におきかえようとするもので、その悪意の深さにおいて、「決定的な」批判であった。森山もそれを指摘して、「事実を客観的につかむかほりに、事実に対する論者の主観的な意欲を表現してゐるにとどまる。」といいきっている。しかしこの保田の理不尽な批判に対して、文学における階級の観点の必要をいう森山の論調は、意外によよわしい。「現実生活の探究と観察において、生活現象そのものの中にプロレタリア階級の主観に相応したものを発見し、且つ描く」という一種の現実反映論を、森山はプロレタリア文学の使命として再確認し、保田にこたえている。森山独特

の相手をみて法を説く流儀だが、保田のきおった公式否定をときほぐそうとして、かえって軟弱なリアリズム論になっている。それにしても、これでは、川口の「否定的リアリズム」を批判したさいにみせた社会主義リアリズムのつよきな解釈は、まるで生かされていないことになる。これはどういうことであろうか。川口らにみられる旧ナルブ内部の理論的退化をおさえ、外からの政治主義批判はリアリズムの方法論の検討にきりかえる、この点における理論の調節に、社会主義リアリズムに対する森山独自の幅のある解釈が生まれた、といちおうはいえよう。さらにはっきりいえば、森山のばあいですらも、社会主義リアリズム認識は、もっぱらリアリズム強化の理論としての使用にとどまったわけで、かれ自身の批評基準になりきってはいなかったのである。

保田がプロレタリア文学の生命ともいふべき階級の観点を「個人」に対する外的規制として否定する以上、森山は保田の論理を逆手にとって、その一種の主体性論をささえるロマン主義的妄想の根拠をつくべきであった。政治主義批判の最もダイナミックな理論化といえる亀井勝一郎の「文学における意志的情熱」(『現実』9・4〜6)にも、森山をふくむ旧ナルブの正統的指導理論を非難する部分があるが、森山は保田へと同様、亀井に対しても、かれらに共通な現実拒否の姿勢をとらえ、反駁する必要があった。しかし森山は、亀井への反論において、「作家と現実との距離、現実との格闘精神、真実を追求する情熱」を第一義とする亀井の主体尊重論をうけいれ、「しかし批評上や芸術理論上の問題は夫だけにとどまるものではない。たとへば内容と形式の問題、芸術史お

よびその方法の問題、創作方法と世界観の問題等々があつた。」と、亀井の提言に条件をつけ、注文を返しているにすぎない。実をいえば、「創作方法と世界観の問題」をきりすててまで亀井が固執する主体性論——「すべてのプログラムの実体は人間である」——の内容にはなく、その提論の根拠にこそ森山はこだわらるべきであつたらう。「若しも『社会主義的リアリズム』の問題が起つたときに、川口氏や亀井氏のやうな専門的な批評家が、問題を正しく展開させてゐたら一介の詩人である僕などの手がどれだけ省けたらう。」などと、森山がいい出す必要はなかつた。川口は別としても、亀井は、この森山の温厚なことにばに正當な自己弁護をこそ用意すべきであつた。「批評における観照主義」(9・8)での森山批判にしても、実質的には、ナルブ解散後のプロレタリア文学に対する追いうちにはかならなかつた。

リアリズムの社会主義的な成熟を期待する森山にとっては、その成熟を現実と可能とする場の用意が、それこそ不断の関心事であつた。その観点から森山は、亀井や林を最後まで味方とみて、むしろ、その主張をプロレタリア文学全体の立場から補わうと努力したのである。森山は亀井や林の提言にだけではなく、たとえ『文学界』九月号における座談会「リアリズム」の成果などをも吸収するかたちで、「観照主義に対する趨勢」(9・10)の中に、次のようなリアリズム論を記している。

われわれが求める文学上のリアリズムは、事実に対する受身の描写へ赴くものでは決してない。作家の主観を無視しては何のリアリズムもあり得ない。たと大切なことはその「主

観」なるものが、決して先天的な、また社会關係から独立した純粹に個人的なものではあり得ないといふことである。天才的な個人のどんなに強烈な情熱も、それだけでは現実世界の客観的眞実をつかむとは云へない。その情熱や苦悶はしばしば現実の行程をおほひかくしさへするのである。現代文学における観照主義をほんとうに克服し得るものは、この現実と和解し得ず、それをふところ手して眺めることの出来ない階級の作家であり、現実社会との不調和のために単にみづから深刻に苦悶し、意欲するだけではなく同じ苦悶をもつた勤労大衆とともに歩まずに居れぬ作家、現実の根本的な矛盾を眞に客観的に描き出し得る作家であらう。私たちの求めるリアリズムはかういふ意味で能動的なものであり、生活現象の本質の把握のために本當の「客観主義」を貫かうとするものだ。作家の主観的な精神、現実の可能性があたへる夢や理想を無視するものでもなくて、たとそれを右のやうな眞の客観的な把握のなかに表現しようとするものである。

これは森山が、ナルブ解散いらい社会主義リアリズムに対する入念な「日本の消化」のゆきつくはてにつかんだ的確なリアリズム理論であり、蔵原・宮本らの縁で敷設された「唯物弁証法的創作方法」の一掃結であつた。そして、イデオロギーの直接支配を排除した客観的リアリズムとして、一面、転向文学の理論的支柱となり、他方、『人民文庫』の庶民的リアリズムにつながる側面ももつていたように思われる。